

巡回企画展のご案内

WASHI 紙のみぞ知る用と美 展

The Wondrous Beauty and Utility of Japanese Handmade Paper

会期:<大阪>2016年9月9日(金)~11月22日(火)

<東京>2016年12月8日(木)~2017年2月25日(土)予定

会場:LIXILギャラリー (大阪会場)



写真 1:修二会紙衣。

東大寺二月堂で行われる「修二会」(お水取り)で練行衆(僧侶)が着用した紙衣。灯明の煤跡が見られる。
白い和紙は清浄を表し、練行衆は自ら紙衣紙を揉んで仕立てる。紙衣は、揉みほぐした紙でできた衣で、日本では平安時代より存在していたと記録されている。W1250×H1280(mm)

所蔵: 桂樹舎和紙文庫、撮影: 佐治康生



<http://www1.lixil.co.jp/gallery/>

「建築とデザインとその周辺」をめぐり、独自の視点でテーマを発掘するLIXILギャラリーの企画展では、大阪：2016年9月9日（金）～11月22日（火）、東京：2016年12月8日（木）～2017年2月25日（土）の期間、「WASHI 紙のみぞ知る用と美」展を開催します。

和紙でつくられたお椀、傘、着物…。その優れた特性と加工技術により、江戸時代以降、和紙の用途は一気に広がり様々な生活道具が生み出されました。本展は、「加工」の視点から捉えた和紙の造形文化と変幻自在な素材の魅力を、江戸から昭和初期の最盛期につくられた実資料約80点より紹介します。

開催概要

「WASHI 紙のみぞ知る用と美」展

The Wondrous Beauty and Utility of Japanese Handmade Paper

会 期	2016年9月9日（金）～11月22日（火）＜大阪会場＞ 2016年12月8日（木）～2017年2月25日（土）＜東京会場＞
開館時間	10：00～17：00＜大阪会場＞ 10：00～18：00＜東京会場＞
休 館 日	水曜日
会 場	＜大阪会場＞大阪市北区大深町4-20 グランフロント大阪南館タワーA 12階 ＜東京会場＞中央区京橋3-6-18東京建物京橋ビル LIXIL:GINZA2F
入 場 料	無料
企 画	LIXILギャラリー企画委員会
制 作	株式会社LIXIL
協 力	其角堂コレクション、桂樹舎和紙文庫、公益財団法人 紙の博物館

展覧会の見どころ

日本で和紙が広く作られるようになったのは、江戸時代になってからのことです。原料として主に使われていた楮・三椏・雁皮などの植物の靱皮繊維はしなやかでねばり強く、薄くても丈夫で美しいため、さまざまな成形に向く身近な素材として認知されていきました。

和紙は、折り畳んで和傘や提灯にしたり、紙縴を編んで柿渋を塗り箱ものや笠にしたり、揉み和らげて紙衣を作ったり、紙糸を織ることで衣類に仕立てるなど、書写利用はもとより、建具や食器、衣服、玩具にいたる多様な日用品の材料として普及したのです。漉き方や産地によって特長のある和紙に、さまざまな加工技術が加わることで、暮らしを彩る道具たちが誕生していきました。改めて用途のバリエーションを見つめると、和紙の秘めた力と人々の手業の粋を感じることができます。

本展では、木、布、皮などに代用された変幻自在な紙製品約80点を、「衣」「食」「住」「遊」の生活場面のコーナーに分けて紹介します。和紙文化が栄えた江戸から昭和初期にかけ丹精を込めて生み出された逸品をご覧ください。日本のみならず意匠を凝らした紙工芸品が数多く残る韓国の資料も交えて展示します。繊維の特長は解説を用意し主な役割を伝えます。本展を通して、さまざまな特性が活きた和紙の造形文化を楽しんでいただくとともに、未来につながる和紙の可能性を再考していただく機会になることでしょう。

写真 2



写真 3



写真 4



写真 5



●主な展示 住・衣・食・遊 ～ 暮らしを彩る紙

「住」：八面六臂の働きもの

このコーナーでは、住まいの中で使用された紙製品を紹介いたします。まず、襖障子に用いられる「江戸唐紙」や「利久紙」、雲母や胡粉の描画による「襖紙見本帳」などをご覧ください。大胆な図案や色柄からは、襖紙が空間を仕切るだけでなく室内を装飾してきた役割が伺えます。また、和紙による光の拡散効果を利用した「行灯」や携帯用「提灯」などの照明具、屋内用の敷物や掛け布団用の和紙も展示します。さらに、皮革を模造した「擬革紙」の中でも、凸凹文様が美しいヨーロッパの「金唐革」をなぞらせ、紙加工の粋と言われる「金唐革紙」で作られた小箱（写真2）や筆入れを展示します。独特の趣がある和紙の表情をご覧ください。

「衣」：まとい携帯する

身に着ける紙製品として色々な種類が登場します。和紙を揉んで柔らかくし、表面に柿渋や寒天、こんにやくを塗り仕上げた「紙衣」や、縦糸に和紙を用いて織り上げた「紙布」（写真3）、紙縷を網目状に編んだ肌着などを展示します。また女性の嗜みとして髪を結いまとめる「元結」や装飾用の「丈長」、男性用の「煙草入れ」や「煙管筒」「陣笠」など、風合いや細工の妙をご覧ください。

「食」：量産できる身近な素材

和紙を張り重ね、漆で仕上げた「お椀」（写真4）や、紙縷を編んで成形し、漆や柿渋で塗り固める長門細工の「瓢箪型酒器」などをご覧ください。自由な成形に加えて、編み方と加飾にも意匠を凝らし、軽量で携行に便利な食の道具が作られました。手のひらサイズのぐい飲みや旅行用のおむすび入れ、特大の雑穀入れや茶壺なども紹介します。

「遊」：豊かな表情を愛でる

ここでは貴重な歌川国貞のちりめん錦絵「源氏姿花の宴」を展示します（前期のみ／写真5）。ちりめん紙とは、通常の版木で摺られた錦絵を6～8割ほどのサイズに揉み縮めたものですが、複雑な技術が必要なため今ではその技の伝承が危ぶまれています。細やかな風合いと凝縮された色合いは必見です。また、紙製の節句飾りの雛鎧も展示します。蒔絵を施し、兜の鉢や面頬には鉄を模して錆漆をかけるなど、見応えのある重厚なつくりとなっています。その他、張子の三春人形など、細工がしやすい紙ならではの特性を活かした躍動感ある作品をご紹介します。

リリース用画像

本リリースに掲載された画像（写真 1～5）の送付をご希望の際は、メールにて担当者までお問い合わせ下さい。また、ウェブサイトにはその他の画像も掲載しておりますのでご確認ください、お問い合わせ下さい。

http://www1.lixil.co.jp/gallery/exhibition/detail/d_003551.html

【写真キャプション・クレジット】

写真 2：金唐草紙花唐草文様箱。木箱に金唐草紙を張ったもので、明治後期のものと思われる。幾何学模様と花模様が全面に描かれている。W360×D230×H270 (mm) 所蔵：桂樹舎和紙文庫

写真 3：紙布手提げ袋（女性用）。明治時代。縦糸に和紙、横糸に綿糸を用いて織った紙布を色鮮やかに彩色し、縫製した手提げ袋。W160×D120×H220 (mm) 所蔵：其角堂コレクション

写真 4：黒漆塗椀。漆はごく薄くかけてあり、細幅に切った和紙を放射状に張ってある様子がうかがえる。重さはわずか22g。Ø120×H75 (mm) 所蔵：桂樹舎和紙文庫

写真 5：歌川国貞画ちりめん錦絵「源氏姿花の宴」。慶応元年（1865）頃。源氏物語を翻案した柳亭種彦作「にせむらさきいなかげんじ修 紫 田舎源氏」の一場面を国貞が描いた錦絵をちりめんにしたもの。W150×D210 (mm) 所蔵：公益財団法人 紙の博物館
撮影すべて：佐治康生

関連企画のご案内

【講演会】和紙のふしぎ－素材が語る可能性

日 時 2016年10月10日（月・祝）14:00～15:30

講 師 関 正純（高知県立紙産業技術センター 所長）

会 場 LIXIL ショールーム大阪 セミナールーム

大阪市北区大深町 4-20 グランフロント大阪南館タワーA 11 階

費 用 無料 *要予約、定員 70 名

予約方法 電話もしくはホームページから

内 容

様々な変化する和紙の魅力とは？和紙の歴史をひも解きながら、原材料や製造工程、産地の違いなども含めて幅広くお話しいたします。また、和紙の用途に多様性が出てくる背景を繊維の特性に触れながら解説いただきます。日本特有の和紙を次代にどのように伝承していくのか、これからの可能性についても語っていただく予定です。

新刊 LIXILブックレットのご案内

LIXIL BOOKLET 『WASHI 紙のみぞ知る用と美』

9月上旬発売予定（76 ページ予定、本体価格 1,800 円）

構成案（予定）撮影：佐治康生

【図版構成 1】和紙のちから

【図版構成 2】衣食住遊－暮らしを彩る紙

【論考】「和紙の魅力と可能性」関正純（高知県立紙産業技術センター 所長）

「手漉きの和紙の用と美」増田勝彦（和紙文化研究会副会長）

リリースに関するお問い合わせ先

LIXIL ギャラリー

xbn@lixil.com

大阪会場担当：高橋麻希／東京会場担当：笥天留、村木玲美